

普及活動現地情報

「農業現場では、今」

令和元年 8月号



【伊都振興局】8/2 重点プロジェクト【省力化と新品種導入による柿産地の振興】
～柿葉利用モデル園のテスト収穫～

和歌山県農林水産部経営支援課

(農業革新支援センター)

はじめに

普及活動現地情報は、普及指導員等が行う農業の技術普及、担い手育成、調査研究、地域づくり等の多岐に渡る現場普及活動や、運営支援を行っている関係団体の活動、産地の動向等、その時々々の旬な現場の情報をとりまとめたものです。

それぞれの地域毎の実情に応じて、特徴ある普及活動を展開していますので、是非、御一読頂き、本情報を通じて、普及活動に対する御理解を深めて頂くと共に、関係者の皆様にとって、今後の参考になれば幸いです。

また、本情報については、カラー版（PDF ファイル）を和歌山県ホームページ内（農林水産部経営支援課：アドレスは下記を御参照下さい。）に掲載しており、過去の情報も閲覧出来ますので、併せて御活用下さい。

和歌山県農林水産部経営支援課ホームページ 普及現地情報アドレス

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070900/hukyu/>

検索サイトより、以下のキーワードで御検索下さい。



I 海草振興局	1
1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】 ～海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム会議を開催～	
2. 市内産種ショウガの次世代生産性の検討	
II 那賀振興局	2－3
1. 那賀地方いちご生産組合連合会総会・研修会を開催	
2. 兵庫県へ先進地研修（紀の川市環境保全型農業グループ）	
III 伊都振興局	4－5
1. 重点プロジェクト【省力化と新品種導入による柿産地の振興】 ～柿葉利用モデル園のテスト収穫～	
2. 柿料理、郷土料理を作ってみよう！橋本市内小学校での食育活動	
3. 新規就農者研修会を開催	
IV 有田振興局	6－7
1. 「おいしとまと」の出荷が最盛期	
2. 有田地方4Hクラブ連絡協議会の勉強会が開催されました！	
3. 有田地方生活研究グループ先進地研修開催	
V 日高振興局	8－10
1. 県議会議員と日高地方農業士会との意見交換会	
2. 日高地方農村青年交流会を開催	
3. 「農トレ！ひだか」～第2回セミナー開催～	

VI 西牟婁振興局 **11-12**

1. 重点プロジェクト【ウメ・ミカン産地のスマート農業実証】
～ミカン園での自動農薬散布用ドローンと自走式草刈機の実証～
2. 水稻奨励品種決定圃現地調査を実施

VII 東牟婁振興局 **13-15**

1. 重点プロジェクト【新規就農者育成を核としたイチゴの産地育成】
～イチゴ育苗圃現地研修（第3回セミナー）を開催～
2. 新宮周辺地場産青果物対策協議会が先進地視察研修を実施
3. ジャバラ幹腐病現地調査・対策検討会を実施
4. 近畿大学附属中学校1年生が稲刈りを体験

VIII 農林大学校 農学部 **16**

1. アグリビジネス学科プロジェクト学習
～農大観光農園 Sweet Berries（第2回 ブルーベリー）開催～

IX 農林大学校 就農支援センター **17**

1. 社会人課程の実習で塩漬け梅の天日干しを実施
2. ウィークエンド農業塾 農業入門コース(第2班)開講

X 経営支援課（農業革新支援センター） **18**

1. 和歌山県農業士会連絡協議会が県外研修を開催

I 海草振興局

1. 重点プロジェクト【次世代につなぐ下津みかん産地への取り組み】

～海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム会議を開催～

海南・下津地域の農業を将来に継承していくため、昨年度に「海南・下津農業の将来を考えるワーキングチーム」を設置し、今後着手すべき事項を検討した。

8月30日、今年度第1回会議をJAながみねしもつ宮農生活センターで開催した。会議には、構成員である海南市産業振興課、JAながみね、当局農業水産振興課の担当職員、農業者代表（下津町農業士会会長、下津町農業研究会青年同志会会長）と下津町内援農実践者の出席があり、これまでの活動経過報告や今年度ワーキングチームで作成を予定している「下津の将来ビジョン実行計画」、「援農者受入の心得」の具体的な内容等について活発な意見交換が行われた。また、下津町内援農実践者とJAながみねから援農に関する取組状況について、当課から昨年実施した労働力確保に関するアンケート結果についてそれぞれ報告をした。

今後もワーキングチーム会議を定期的で開催し、地域農業の維持発展に繋がる取組を提案していきたいと考えている。



ワーキングチーム会議

2. 市内産種ショウガの次世代生産性の検討

和歌山市種生姜生産促進協議会（和歌山市、JAわかやま、県農、和歌山県）では、新ショウガ生産のための種ショウガの一部自給を目指し、栽培推進に取り組んでいる。

8月22日、和歌山市内で生産・貯蔵された平成30年度産の種ショウガを定植した新ショウガ生産ハウスにおいて、収穫調査を実施した。結果、新ショウガの肥大は順調で、病害の発生もみられず、市内産種ショウガは種子として問題無いことを確認した。

今年度も和歌山市内で種ショウガを生産しており、今後、種ショウガの生育、品質等についても調査を実施する予定である。



新ショウガ栽培ハウスでの収穫調査

Ⅱ 那賀振興局

1. 那賀地方いちご生産組合連合会総会・研修会を開催

8月5日、当局で令和元年度那賀地方いちご生産組合連合会（中村昌司会長）の総会及び研修会が開催され、会員等30名の出席があった。

研修会では、農業試験場の田中主査研究員から「紀の香」の品種特性と栽培のポイント」、同試験場の川西主査研究員から「イチゴの環境制御技術」と「農業試験場における育苗管理」について講演があった。

田中主査研究員からは、「紀の香」と管内の主力品種である「さちのか」、「まりひめ」と比較した品種特性や栽培ポイントについて説明があった。「紀の香」を初めて栽培する生産者もいることから、具体的な栽培管理方法など大変参考となった。

川西主査研究員からは、環境制御技術の概要と施設内の炭酸ガスと温度が生育にどう影響するかなど、具体例を用いて説明があり、導入するうえでの参考材料になったようだ。また、参加者らは農業試験場での育苗管理に関心が特に高く、興味深く聞き入っていた。

農業水産振興課からは、ハダニ類の天敵導入事例調査の結果について報告した。



研修会

2. 兵庫県へ先進地研修（紀の川市環境保全型農業グループ）

紀の川市環境保全型農業グループ（畑敏之会長）は、8月27日に先進地研修として松本NGKグループ（兵庫県神戸市）を訪れ、会員7名が参加した。

松本NGKグループは、平成15年に有志7名でグループを設立。水稻の有機栽培や農薬を削減した栽培を開始した。始めた当時は集落営農が全国的に流行していた頃であり、機械の共同利用が目的であったが、都市農業衰退への危機感や価格競争、大規模・企業化等を背景に地域農業を残すことが主たる目的となった。化学合成農薬と化学合成肥料不使用で生産したコシヒカリを「菜の花米プレミアム」として販売するなど製品のブランド化をはじめ、「田んぼ花摘み会」の開催、大学生の農業体験や企業の新入社員研修など大学・企業との連携にも取り組んでいる。

平成29年度には環境保全型農業推進コンクールの近畿地域環境保全型農業推進連絡会議会長賞を受賞している。

また、安定的な経営や継続した取組の難しさなど苦労話も聞くことができ、有意義な研修となっ



研修会

た。他に、会員から、景観向上と有機物補給を目的とした緑肥栽培において植物体の大きさとすき込み時期の違いが後作に及ぼす影響など熱心に質問をしていた。

農業水産振興課では、会員らの経営や栽培の参考となる研修会を今後も開催していく予定である。

Ⅲ 伊都振興局

1. 重点プロジェクト【省力化と新品種導入による柿産地の振興】 ～柿葉利用モデル園のテスト収穫～

近年、管内の柿の生産現場では、生産者の高齢化が進み、放棄園地の増加が問題になっている。そこで、農業水産振興課では軽労的に柿園を管理し収益を得る方法として、7年間放棄された樹で、樹の再生と柿の葉寿司用の柿葉利用の可能性について昨年度より検討を行っている。

昨年度はうどんこ病が多発したため、本年度は柿葉で使用可能な薬剤を散布し、8月2日に柿葉のテスト収穫を実施した。

3樹から収穫したところ、収穫できた葉は1樹あたり平均約210枚であった。

また、1人で100枚の葉を収穫するのに要する時間は16分34秒であった。病虫害の発生状況は、うどんこ病の罹病率は防除により約1%に抑えられたが、ケムシ類が多発し、約20%の葉が食害された。

今後、データを取りまとめて柿葉生産の栽培体系モデルを作成する。



柿葉のテスト収穫

2. 柿料理、郷土料理を作ってみよう！橋本市内小学校での食育活動

橋本市生活研究グループ連絡協議会（小林由美子会長）では、橋本市立紀見小学校と三石小学校から夏休みを利用した体験学習の一つとして調理教室開催の要望を受け、8月5日、6日、23日の計3回、柿カレーの調理体験とこんにやく作り体験を開催した。

これは、両校が児童の夏休みでなければ出来ない体験活動や、大人との交流を通じて豊かな心を育む事を目的に実施しているもので、今年は延べ75人の児童と、保護者やボランティア4人が参加した。

農業水産振興課職員から柿や料理について説明した後、生活研究グループ員が作り方を説明し、班に分かれて調理を行った。参加した児童は、こんにやく作りでは原料を水と混ぜることで粘りが出てくることや、スーパーで売っているこんにやくと色が違うことなどに驚いていた。また、柿カレーは普段食べているカレーにまろやかさが増し、甘くて美味しいと好評であった。

当課は、グループ員とともに引き続き郷土の味を通して食の大切さを伝えながら子供だけでなく保護者も巻き込んだ食育活動を支援していく。



調理説明するグループ員



柿カレーとサラダ作り



お母さんも一緒にこんにゃく作り



まるでお刺身！？さしみこんにゃく

3. 新規就農者研修会を開催

8月8日、農業水産振興課では、新規就農者の栽培技術の向上と先輩農家との交流を図るため、果樹をテーマにした新規就農者研修会を開催した。研修会には新規就農者12名と農業士8名が参加した。

果樹間複合経営農家の海堀安彦氏を講師に、始めに九度山町内の柿園地において管理方法について研修した。また、海堀氏の倉庫において脱渋装置を見学した。続いて、九度山町入郷コミュニティ消防センターに場所を移し、海堀氏から経営概要及び経営理念について説明を受けた後、意見交換を行った。

参加者からは、「大先輩の試行錯誤を知れて良かった」、「海堀氏の農業経営の話がとても面白く、聞いていて飽きなかった。これからの経営に参考になった」等の感想があった。

当課では、今後も新規就農者の経営力の向上を目的とした研修や農家相互の交流を図るための取組を実施していく。



柿産地の視察



脱渋庫の見学

IV 有田振興局

1. 「おいしとまと」の出荷が最盛期

有田川町生石地区の生石蔬菜出荷組合は、夏の冷涼な気候を生かし、夏秋期に収穫するトマトを生産、「おいしとまと」として岸和田市の市場へ出荷している。

組合員数は12名、栽培面積は3.2haで、「りんか409」などの大玉系品種を栽培している。降雨による病気のまん延などを防ぐため、ビニールハウスや簡易な雨よけ施設で栽培している。7月下旬から収穫が始まり、8月下旬から9月中旬が出荷のピークで11月末頃まで出荷が続く。

また、気温が下がり、成熟に時間がかかる10月下旬以降は更に糖度がのるため、糖度基準7度以上、かつ3S～Mサイズのを「おひさまとまと」のブランド名で厳選出荷している。

農業水産振興課では、この夏秋トマト産地の高品質安定生産を支援するため、近年の夏期の多雨条件であっても裂果しにくく、糖度の高い品種の選抜を目的とした試験を実施している。今年度は8月22日から11月まで果実品質調査を行い、収穫終了後には草丈や収量性などの調査を行い、この産地に適した品種を選定していく。



「おいしとまと」



主に屋根掛けビニールで栽培

2. 有田地方4Hクラブ連絡協議会の勉強会が開催されました！

8月26日、有田振興局において、有田地方4Hクラブ連絡協議会（成川僚会長）が、クラブ員の交流と栽培技術の研鑽を目的として勉強会を開催した。初めての取り組みであったが、各市町からクラブ員19名が出席した。

当日は、バイエルクロップサイエンス株式会社 大阪営業所 第二営業グループ チーフ 山内俊哉氏を招き、「カンキツ主要病害虫」について講演していただいた。

主要病害や虫害の症状、発生しやすい条件等、基本的なことについて説明を受けた後、バイエルクロップサイエンス株式会社が扱う薬剤の使用方法や、和歌山県内で行った試験結果についても情報提供があり、クラブ員らは聞き入っていた。

また、講演後クラブ員は、地域の病害虫発生状況を把握するため、互いの園地の状況を熱心に交換していた。

参加者からは、「基本的なことから聞くことができ勉強になった」や「試験データについて知ることができてよかった」等の感想が聞かれた。

農業水産振興課では、栽培技術向上を目的とした4Hクラブ員独自の勉強会開催の取組を今後も支援していく。



勉強会

3. 有田地方生活研究グループ先進地研修開催

8月29日、有田地方生活研究グループ（樫原光代会長）が先進地研修を開催し、会員、関係者合わせて33名が出席した。

当日はハグルマ株式会社（紀の川市）と農事組合法人くにぎ広場・農産物直売交流施設組合（橋本市）、道の駅くしがぎの里（伊都郡かつらぎ町）の視察を行った。

ハグルマ株式会社では、トマトケチャップや、県産果実のゆずを使用したドレッシング等の加工品開発の取り組みや販売状況の説明を受けた後、施設の見学や加工品の試食を行った。

くにぎ広場では、岡本進組合長より農事組合法人くにぎ広場の開設の経緯や、取り組みについて説明をうけた。会員らは、はたごんぼ（橋本市西畑地区で栽培されていた直径5～6cmのごぼう。2008年に産地が復活した。）の生産状況や、はたごんぼを活用した加工品の製造販売の取り組みなど、精力的な活動内容に熱心に耳を傾けていた。

その後、道の駅くしがぎの里を見学し、農産物や加工品の販売状況を視察した。

農業水産振興課では今後も先進地との交流を行うなど、生活研究グループの活動活性化を図っていく。



ハグルマ株式会社



くにぎ広場 岡本組合長からはたごんぼの取組説明を受ける

V 日高振興局

1. 県議会議員と日高地方農業士会との意見交換会

日高地方農業士会（山田裕司会長）は、8月1日に日高振興局別館会議室において、県議会議員と日高地方の農業に関する課題について意見交換を行った。この意見交換会は、地域のリーダーである農業士が日高地方の農業振興に資することを目的に、平成19年から始まり、平成23年から隔年で開催しており、今回で9回目となる。当日は、同会役員理事17名と御坊市・日高郡選出県議会議員4名、オブザーバーとして日高振興局長及び同農林水産振興部長が出席した。

意見交換会のテーマは、①農地の維持と耕作放棄地対策、②鳥獣害（サル）対策、③担い手対策であり、これらは各市町農業士会からの事前提案により決定した。

まず、「農地の維持と耕作放棄地対策」については、水田の維持に絞って意見交換がなされ、農業士から高齢化や農業機械の故障を機に営農をやめることが多い中、地域の借り手農家も耕作面積が限界となっている現状を説明し、借り手への支援、県産米の消費拡大について意見が出された。

次いで、「鳥獣害（サル）対策」では、近年サルによる農作物被害が問題となっており、耕作放棄地の増加につながることから対策を望む意見が出された。農業水産振興課から県が行っているGPSを活用した行動域調査について説明をした。

最後に、「担い手対策」では、農家子弟への支援策、農業高校との連携、労働力不足対策について意見が出された。

それぞれの課題について、県議会議員から提言や助言をいただき、参考となった。また、今回の意見交換が今後の議員活動に活かしていただき、日高地方の農業振興につながれば幸いである。



意見交換会



意見を述べる県議会議員

2. 日高地方農村青年交流会を開催

8月24日、日高地方4Hクラブ連絡協議会（堀昇平会長）主催による、日高地方農村青年交流会を開催し、日高地方の農業青年と異業種の女性ら合わせて14名が参加した。

本交流会では、日高地域の産品や農業について異業種の方にもっと知ってもらい、その魅力を感じてもらおうと、特産の「梅」を用いた農産物加工体験や施設の見学会を行った。

体験メニューでは、梅染愛好会にて梅染めの魅力を発信しているみなべ町指導農業士の二葉美智子氏を講師として招き、染色に用いる梅の樹皮、染料抽出時間、染色素材と織り方、染色時間で風合いの異なるオリジナル梅染めストール作りを楽しんだ。その後、みなべ梅郷クラブが講師となり、みなべ町特産の「南高」他、新品種の「露茜」「翠香」の計3種類の梅を使った、「冷凍梅で簡単マイ梅ジュース作り」の説明が行われた。「南高」以外の梅を見る参加者も多く、できあがりを楽しみに互いに和気あいあいとジュース作りに取り組んでいた。

また、体験後は、梅郷クラブ員の農園を訪問し、園地や梅干し作りの現場を園主の説明交えて見学した。梅干し作りを間近に見学でき、女性参加者らの関心は大変高かった。

参加者からは、「体験を通じて梅の魅力を知ることができたのでよかった」、「また機会があれば体験交流に参加したい」との声があった。普段交流する機会のない異業種の方々に對し、加工体験や産地見学を通じて日高の魅力を伝えることができ、有意義な交流会となった。



完成したオリジナルの梅染めのストール



3種の梅を使ったマイ梅ジュース作り体験

3. 「農トレ！ひだか」 ～第2回セミナー開催～

8月30日、日高地方4Hクラブ連絡協議会（堀昇平会長）と日高振興局農林水産振興部の共催により、管内の若手農業者や新規就農者等を対象とした研修会「農トレ！ひだか」の第2回セミナーを開催した。4Hクラブ員他合わせて17名が参加した。

今回は、農業現場の労働力確保に焦点を当て、海南市下津町で「蜜柑援農」に取り組まれている FROMFARM 代表の大谷幸司氏を講師として招き、援農の取組背景や仕組み、その成果や課題などについて講演いただき、その後講師と参加者らとの座談会を開催した。

若い労働力として期待される援農者は、単にお金儲けや日給の高さで来るわけではなく、

「生きがい」や「働きがい」を求めていること、リピート需要がある一方で、募集ツールは口コミやSNSがメインであることその他、地元農家の支援・協力体制、空き家確保の重要性についても説明いただいた。また、講師との座談会では、「金額設定の基準は?」、「空き家を貸してもらうコツは?」、「天候不順による作業中断時の給与の対応は?」など、援農時に想定される疑問点について、講師と情報交換を行った。参加者からは、「援農の実態が学べ参考になった」、「今後、援農を検討する上で、講師とつながりができてよかった」との声があった。



援農の取組について説明を聞く参加者



講師を交えての座談会

VI 西牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【ウメ・ミカン産地のスマート農業実証】

～ミカン園での自動農薬散布用ドローンと自走式草刈機の実証～

和歌山県では、農業産出額のうちミカンとウメは約4割を占める重要な品目であるが、農業者の高齢化や減少が進む中で、意欲ある担い手農家へ農地を集積し、規模拡大による経営の安定を図ることが産地の維持において大きな課題となっている。西牟婁地域ではウメ専作またはウメとミカンの複合経営が多く、作業時期の重複による労働力不足の解消と省力化、軽労化が求められている。

そこで、県ではICT（情報通信技術）やロボットなどの技術を農業に取り入れる「スマート農業技術の開発・実証プロジェクト」事業採択を農林水産省から受けて、本年度から2年間、みなべ町及び上富田町のウメ、ミカンの園地で実施することとなった。

8月19日に上富田町岡のミカン園において、自動農薬散布用ドローンと自走式草刈機の現地実証を行い、実証事業チーム（農研機構、県、JA、生産者）及び近畿農政局の関係者30名が参加した。自動農薬散布用ドローンによる水の散布実証では、作業時間の計測や散布量、地形に合わせたドローンの飛行状況、感水紙による水の付着状況を確認し、自走式草刈機による畝間の除草実証では、走行スピードや刈る高さ、作業時間の計測を行った。

実証担当者は、「農薬散布用ドローンの飛行高度は傾斜の上りと下りで違いがあったので、測量をやり直し精度を上げたい」と今後の方向性を述べた。また参加者からは、「ドローン防除で飛行できる風速はどうか（3m/秒以下）」の質問や、「草刈機は向きを変える余地がないと後退するのに時間がかかる。」などの意見が出された。

農業水産振興課では、今後とも関係機関と連携してウメとミカン園において、スマート農業の実証、検討を行っていく。



自動農薬散布用ドローンの説明



自走式草刈機の作業を確認

2. 水稲奨励品種決定圃現地調査を実施

和歌山県では本県の気象条件に適し、栽培しやすく品質、食味、収量等が優れた品種を選定することを目的に、水稲の新品種・系統について農業試験場内及び現地の水稲奨励品種決定圃で特性と生産力を調査し、奨励品種を選定している。

8月22日、上富田町の現地ほ場において、農業試験場岩橋主査研究員、宮本副主査研究員と村畑普及指導員が参加し現地調査を実施した。

今回は‘あきさかり’、‘はるみ’、‘北陸263号(にじのきらめき)’、‘キヌヒカリ(対照)’4品種の病虫害被害程度、稈長、穂長、穂数を調査した。

収量などの試験結果について水稲生産安定化会議で検討した後、審査会を経て奨励品種が決定される。



現地調査

Ⅶ 東牟婁振興局

1. 重点プロジェクト【新規就農者育成を核としたイチゴの産地育成】 ～イチゴ育苗圃現地研修（第3回セミナー）を開催～

8月8日、那智勝浦町苺生産組合（栗野稔近会長）は、イチゴ「まりひめ」の栽培技術向上を図るため、育苗圃現地研修（第3回イチゴセミナー）を開催した。

当日は、生産者13名（内新規就農者4名、新規就農予定者1名）、JAみくまの職員4名、及び農業水産振興課3名が参加し、各生産者の育苗圃場巡回と栽培講習会を行った。

育苗圃場巡回では、生産者同士で灌水頻度や遮光などの育苗管理について意見交換が行われた。生育状況については、圃場により差はみられるものの、7月の長雨の影響で全体的に苗が徒長傾向であった。また、一部の圃場では、炭疽病の発生もみられた。

圃場巡回後は、JAみくまの太田宮農センターにて栽培講習会を行い、JAみくまの笹平主事から農薬の適正使用について、当課堺普及指導員から底面給水育苗方法とアザミウマ対策（赤色系防虫ネット）について説明を行った。

今後は9月に花芽検鏡を行い、その結果を基に適期定植に取り組む。

当課では、今後も関係機関と連携しながら、那智勝浦町苺生産組合の活動を支援していく。



育苗圃現地研修

2. 新宮周辺地場産青果物対策協議会が先進地視察研修を実施

8月6日、新宮周辺地場産青果物対策協議会（小田三郎会長）は、田辺市内（中三栖、秋津町、稲成町）のイチゴとナスの栽培圃場を視察した。当日は生産者6名、市場関係者2名、JAみくまの職員3名及び農業水産振興課1名の計12名が参加した。

最初、田辺市中三栖でイチゴを栽培している山川義明氏の圃場を見学した。山川氏から、イチゴ高設栽培「とこはる」システムと底面給水育苗法への取組について説明があり、参加者からは、システムの導入費用や底面給水による加湿の防止対策などについて質問があった。

続いて、田辺市秋津町で千両ナスを栽培している畑平耕志氏の圃場を見学した。畑平氏の圃場では、ひも誘引が行われており、東牟婁管内で一般的なネット誘引と異なるため、それぞれの誘引方法の利点と欠点について、参加者との間で意見交換が行われた。

最後に、田辺市稲成町で稲成ナスを栽培している榎本哲也氏の圃場を見学した。稲成ナスは伝統野菜として古くから地域で栽培されてきたが、虫に弱いことや秀品率が低いことなどから栽培者が減っており、現在では、生産者は榎本氏を含めて3名とのことだった。参加者からは、稲成ナスの果実特徴や取引価格について質問があった。

当課では、今度も新宮周辺地場産青果物対策協議会の活動を支援していく。



イチゴの底面給水育苗圃場



稲成ナス栽培圃場

3. ジャバラ幹腐病現地調査・対策検討会を実施

北山村の特産品であるジャバラは、平成9年に幹腐病が確認されて以来、発生が年々増加しており、減収の一因になっている。また、村ではジャバラの新加工場を建設する予定で、果実の連年安定生産が喫緊の課題である。

そこで、北山村と北山村じゃばら生産協同組合、北山振興株式会社、JA みくまの、果樹試験場及び農業水産振興課は、8月1日に幹腐病の現地調査、8月7日に幹腐病対策検討会を実施した。

8月1日の現地調査では、村内の主だった農家（ジャバラ6a以上を生産）の圃場を中心に、発生状況を調査した。結果、調査したすべての圃場で発病株が認められ、発生樹率（1カ所以上発生している株の割合）が100%の圃場が過半数を占めた。また、平成9年の同様調査では、水田転換畑での発生が多かったが、今回は畑跡や造成地でも多かった。

8月7日の幹腐病対策検討会では、まず、当課浅井普及指導員から幹腐病発生・防除対策の経過や8月1日の現地調査結果について説明を行い、続いて、果樹試験場武田副主査研究員から防除対策の徹底として、5月～7月の重点防除期間における3回以上の殺菌剤散布の推進や、発病部位の削り取りとバッチレート塗布、症状の進行した樹は伐採・改植も検討する等の提案があった。

今後は、幹腐病防除を強化した防除暦を作成し、収穫前の打ち合わせ時など機会を捉えて生産者に周知徹底するとともに、生産者相互による巡回体制の整備や各圃場の圃場診断の実施等についても検討を進める。

北山村では、耕作放棄圃場などを借り受けて新規植栽し、ジャバラを増産する計画である。

当課では、今後とも関係機関と連携を密にし、幹腐病対策や高齢者が管理しやすい低樹高化に取り組み、安定生産を推進していく。



幹腐病現地調査 (8/1)



幹腐病対策検討 (8/7)

4. 近畿大学附属中学校 1 年生が稲刈りを体験

8月27日、三津ノ地域活性化協議会(下阪殖保会長)、JAみくまの及び農業水産振興課は、近畿大学附属新宮中学校の1年生34人を対象に、新宮市熊野川町の三津ノ地区の水田において稲刈り体験を開催した。生徒らにとっては、本年4月25日の田植え体験に続き、2度目の農業体験となった。

下阪会長から「台風の影響による長雨で稲が倒れて刈りにくいかもしれないが、今日は予報とは違い雨が降っていないので、がんばって稲刈りしよう。」と開会の挨拶があった後、当課浅井普及指導員から、田植え後の稲の生長や稲刈りから精米までの一連の作業について説明をした。

生徒たちは、JAみくまの清水営農指導員から鎌の使い方などの指導を受けながら各自稲刈りを行い、「米作りや農業全般の大変さが改めて分かった。お米の大切さを今まで以上に実感し、感謝して食べる。」「農家の人たちはすごいと思った。」等感想を語った。

当日収穫されたお米は精米され、9月に開催される近大附属中学校の文化祭で「近中米」と表示して販売される予定である。



稲刈りなどの説明



稲刈り

Ⅷ 農林大学校 農学部

1. アグリビジネス学科プロジェクト学習

～農大観光農園 Sweet Berries (第2回 ブルーベリー) 開催～

農林大学校農学部では、学生が自ら課題解決を図る能力の習得を目的として、プロジェクト学習を実施している。アグリビジネス学科(2年生、5名)では、学生の発案により前年度から農業の6次産業化を目指して観光農園の経営をテーマに取り組んでいる。今年4月には1回目として、校内のハウスを会場にイチゴの観光農園を開催した。

今回は2回目として8月6日及び9日の2日間にわたり、事前にインターネット経由で受け付けた23名の一般消費者を迎えてブルーベリーの観光農園を開催した。

学生らは前回のイチゴでの経験や、事前に先進事例調査で訪れた紀の川市の観光農園での調査を活かして運営を行った。1日目は準備や応対に手間取ることもあったが、2日目は1日目の反省を踏まえてスタッフの動きをシミュレーションした効果があらわれて、スムーズに設営や接客を行うことができた。

1年半にわたって行ってきた観光農園のプロジェクト学習は、これから経営費の試算やアンケート結果の整理を経てまとめを行い、12月の校内発表会で発表する予定。



受付で収穫適期を説明



食べ頃の実を収穫

IX 農林大学校 就農支援センター

1. 社会人課程の実習で塩漬け梅の天日干しを実施

8月5日から8日まで、社会人課程の実習で1ヶ月間塩漬けにしていた梅の天日干し作業を行った。

研修生たちは、塩漬けした梅を水洗いし、天日干し用のざるの上に並べたり、干している梅をひっくり返したりする作業を行った。また、この作業を通じて、梅の大きさによって仕上がりの日数が変わることや、日焼けした部分ができあがりの際に皮が固くなることなどを学んだ。

干し上がった梅は樽に詰めて保存し、梅干しの加工についての特別研修で使用する。



ざるに梅を並べる様子



干している梅を返す様子

2. ウィークエンド農業塾 農業入門コース（第2班）開講

8月31日、ウィークエンド農業塾農業入門コース（第2班）が開講した。

受講生は8名で、10月27日までの週末を利用して計10日間、農業の初歩的な知識や技術などを学ぶ。

開講初日は、和歌山県農業の概要と果樹栽培の基礎の講義の後、ブドウとイチジクの収穫・出荷調整、刈払機の使用方法について実習を行った。

1班とは講義と実習の内容が変わるため引き続き受講する方、冬野菜を学んで直売所へ出荷を考えている方、両親の後を継いで果樹の面積を増やしながら野菜・花きの栽培を考えている方などが受講する。

今後は野菜、花き、果樹などの講義、栽培管理や収穫等の実習を行っていく。



ブドウの出荷調整



刈払機取り扱いの説明

X 経営支援課（農業革新支援センター）

1. 和歌山県農業士会連絡協議会が県外研修を開催

和歌山県農業士会連絡協議会（岡田敦雄会長）は8月20日～22日の日程で、宮城県、岩手県で県外研修を行った。今年度は、同連絡協議会設立40周年の記念行事として、普段視察研修が難しい遠方地域での実施となり、同連絡協議会会員9名、県職員3名の計12名が出席した。

初日のせんだい農業園芸センターでは、「収益性の高い農業推進拠点」として、100万人都市から農村部に果樹の観光農園で人を呼び込む取組や、2日目の株式会社南部美人では、海外では当然とされる食品安全の取組、農研機構では、品種開発や病害虫防除などについて、3日目の松本りんご園では、地域と関係性を築きながら、農業やcaféを展開し、労働力を確保するためには賃金だけでなく、そこで働きたいと思わせるような取組の必要性を学んだ。

今回研修に参加した農業士の多くからは、東北地方を訪れたのが初めてとの声が聞かれ、気候や土壌の違いはあるものの、訪れた複数の研修先で、今後の自家の経営に参考になるヒントが得られたと思われる。

東北地方まで移動時間の長い行程であったが、参加者らは移動中にそれぞれ情報交換しながら交流を深めていた。



せんだい農業園芸センター（宮城県仙台市）



株式会社 南部美人（岩手県二戸市）



農研機構 リンゴ研究拠点
（岩手県盛岡市）



松本りんご園 micafe
（岩手県盛岡市）

普及活動現地情報 発行・編集

和歌山県農林水産部経営支援課	TEL073-441-2931	FAX073-424-0470
海草振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL073-441-3377	FAX073-441-3476
那賀振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-61-0025	FAX0736-61-1514
伊都振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0736-33-4930	FAX0736-33-4931
有田振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0737-64-1273	FAX0736-64-1217
日高振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0738-24-2930	FAX0738-24-2901
西牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0739-26-7941	FAX0739-26-7945
東牟婁振興局農林水産振興部農業水産振興課	TEL0735-21-9632	FAX0735-21-9642
和歌山県農林大学校	TEL0736-22-2203	FAX0736-22-7402
和歌山県農林大学校就農支援センター	TEL0738-23-3488	FAX0738-23-3489